

保育者志望学生の性格特性

— 四年制保育者養成に関する研究 —

Characteristics of personality of the students wishing to be an infant school teacher

— A research on 4-year training of infant school teacher —

西田 ますみ¹⁾ 日高 精二²⁾ 常田 奈津子³⁾ 二階堂 邦子⁴⁾

Masumi NISHIDA, Seiji HIDAKA, Natsuko TOKIDA and Kuniko NIKAIIDOU

Abstract

This is a comparative study of physical features (height and weight), Physical strength (grip) and characteristics of personality (Y-G Test) between 2-year Nursery Course students and 4-year Child Development Studies students. These things were made clear through the research of child Development Studies students using 'ego-gram'.

1. The average height of Child Development Studies students (2001Y) is 159.03 cm and it is 2 cm taller than that of student 20 years ago. (significant difference is 5 %) As for weight and grip, there is no big difference.
2. From the results of Y-G Test, it become clear that today's students' emotional stability factor (D.C.I.N) tends to become unstable, and their leading factor (A.S) tends to have controlling tendency compared with those of Nursery Course students 30 years ago. As for the types of personality, students of B-type (delinquency type) — emotional instability type, lacking of adaptability to society type, extroverted type — increase. D-type students who are considered to be suitable for an infant school teacher are 47.7% in Nursery Course and 28.4% in Child Development Studies Department.
3. Speaking of TEG Scale, Child Development Studies students are motherly, kind, helpful and have originality and expressive power although they lack objective judgment. Therefore it can be said that they have suitable personality as students majoring in Child Development Studies.

keywords : *physical constitution, physical strength, personality, training.*

I. はじめに

本学は1999年4月より二年制（短期大学・保育科）から四年制（学部・幼児発達学専攻）へと保育者養成が改組された。そこで、どのような特徴をもった学生がこの専攻を選択しているかを把握し、その実態を明らかにすることをねらいとして1999年から調査研究を行っている⁹⁾¹⁴⁾。

私たちは幼児発達学専攻学生の入学時、卒業時、卒業後と継続的に追跡研究をおこなっていくなかで、これからの保育者に求められる資質とは何か、また、保育者養成はどうあるべきか追求していきたいと考えて

いる。

光岡らは「のぞましい保育者の資質とは何か」ということを継続的に研究してきた。その中でYG, TPI, HTPなどの検査を実施し保育志望学生の入学時の性格特性、2年間の変化、保育者としての意識、対人関係、学業成績、休学者、退学者などについて分析し、2年間の学生生活で経験するさまざまな教育現場の働きかけで保育者としてののぞましい人間像へ変化している傾向が示されたと報告している¹⁾²⁾³⁾¹⁴⁾。

また、近年ではエゴグラムを用いた保育者養成に関する研究も行われるようになり、各自の性格特性を知った上で保育者としての資質をより高めるためにどのようにすればよいか考える手段として活用したり⁵⁾⁶⁾⁷⁾、学生の職業選択も視野に入れた性格特性の分析に利用されている¹²⁾¹³⁾。

私たちのこれまでの調査で二年制・四年制ともに、志

1) 日本女子体育大学（助教授）

2) 日本女子体育大学（名誉教授）

3) 日本女子体育大学（助教授）

4) 日本女子体育大学体育学部附属みどり幼稚園（園長）・日本女子体育大学（教授）

望理由は子どもが好きであることや、保育者のイメージを好意的にとらえていること⁹⁾、子どもに対して親和的で暖かく受け入れ、働きかける態度を持っていることなどについて明らかになった¹⁴⁾。

本研究では身体特性（身長・体重）、体力（握力）、性格特性（YG 検査）について二年制の保育科生と四年制の幼児発達学専攻学生との比較を行った。また、幼児発達学専攻学生を対象に交流分析理論をもとに開発された「エゴグラム」を用いて性格検査を行ったので結果を報告する。

II. 対象者および検査方法

1. 対象者

本研究の対象者は本学幼児発達学専攻学生1999年度入学生43名、2000年度入学生51名、2001年度入学生60名である。退学者、編入学者は除いた。

2. 検査実施日は表1に示した。

表1 検査実施日

	YG性格検査	TEG	新体力テスト
1999Y	1999.5.12	1999.7.14	2001.7.10
2000Y	2000.6.21	2000.9.21	2001.7.16
2001Y	2001.6.19	2001.6.26	2001.7.11

3. 検査方法

身長・体重については健康管理センター実施の健康診断データを採用し、新体力テスト、YG 性格検査（一般用）、TEGについてはそれぞれの実施要項に基づいて実施した。

4. 分析方法

①新体力テストについて⁸⁾

文部科学省は、これまで実施されてきたスポーツテストを様々な観点から見直し平成11年度に「新体力テスト」を決定した。新体力テスト移行後も同じ種目で比較できるのは反復横とびと握力である。ただし反復横とびはラインの幅が120センチから100センチに変更されたので20年前のデータと単純に比較することはできない。

② YG 性格検査について¹⁶⁾

YG はパーソナリティーを多次元的にとらえる特性論の立場に立脚し、簡便で信頼性の高い質問紙法の検査として、臨床、教育、採用といったさまざまな場面で広く用いられている。YG は日常的に見られる12のパーソナリティー特性を測定している。各尺度は以下のようになる。

- D 抑うつ性（悲観的、罪悪感）
- C 回帰性（気分が変わりやすい、感情的）
- I 劣等感（自信がない、自己の過小評価）
- N 神経質（心配性、ノイローゼ気味）
- O 客観性欠如（空想性、過敏症）
- Co 協調性欠如（不満が多い、不信感）
- Ag 愛想の悪さ（短気、攻撃的）
- G 一般的活動性（活発さ）
- R のんきさ（気軽、刺激追求）
- T 思考的外向（思慮不足、大雑把）
- A 支配性（指導性）
- S 社会的外向（社交的）

また、YG では系統値によってプロフィールを分けて全体的なパーソナリティをとらえることができる。典型例は以下の5つである

- A 型(平凡型)：尺度に偏りがなく、目立った特徴がない
- B 型(非行型)：バランスを欠いた性格で、反社会的行動に出やすい
- C 型(鎮静型)：安定しているが消極的
- D 型(適応者型)：情緒安定、活動的、外向的
- E 型(ノイローゼ型)：内向的で過敏、無気力になりやすい

③ TEG について¹¹⁾¹⁵⁾

交流分析とは、対人関係で起こっている交流のパターンを分析する方法で、自我状態について大きく3つに「親の自分 (Parent P)」「大人の自分 (Adult A)」「子どもの自分 (Child C)」そしてさらに細かく合計5つに分けて説明している。

a. P-親 (Parent) の自我状態：幼い頃から自分を育ててくれた親またはそれに準ずる人から取り入れた部分。以下の二つに分けられる。

- ・ CP；批判的な親 (Critical Parent) - 自分の考えや価値観を正しいものとしてそれを主張する部分。良心、理想などと深く関連し、規則などを教える反面、支配的で命令調、ほめるより批判する傾向が高くなると言われる。
- ・ NP；養育的親 (Nurturing Parent) - 思いやり、保護、受容など、子どもの成長を促進させるような母親的な部分。人を励ましたり世話をしたり、保護的で優しいが、反面押しつけがましくなってしまう。

b. A-大人 (Adult) の自我状態：客観的事実に基づいて物事を判断する部分。感情に支配されず、合理

的・論理的冷静な思考傾向が強い。A 的な思考態度は、日常生活では非常に必要なことであるが、過度になると、情緒に乏しい無味乾燥なコンピュータ人間になりかねないとされている。

c. C-子ども (Child) の自我状態：人間が持って生まれたままの姿で、本能的な直感や感情など生命の原点の部分。以下の二つに分けられる。

- ・ FC；自由な子ども (Free Child)－親の影響を受けない本能的で感覚的・創造的な部分。直感的な感覚や創造性の源で、豊かな表現力は周囲に明るさ・温かさをもたらすが、反面過度になると自己中心的でわがままとなり周囲との協調性に欠けてトラブルを起こしやすくなる。
- ・ AC；順応した子ども (Adapted Child)－親などの期待に沿うように常に周囲に気兼ねをし、本来の自分の自由な感情・欲求を抑える「イイ子」の部分。協調性があり、控え目で慎重な反面、簡単に妥協してしまったり、自発性を欠き、依存心が強くなったりしてしまう。

III. 結果と考察

1. 身体特性と体力について

身長、体重、握力について20年前の保育科生値¹⁰⁾と比較して表2に示した。2001Y 生の平均身長が159.03cm で約2 cm 高くなっている(有意差5%)が、体重、握力ともに大きな違いは見られない。

次に、幼児発達学専攻学生の体格・体力と全国平均値を⁹⁾比較して表3に示した。20年前の保育科生値は全国値に比べ18、19歳ともに体重が重く、反復横とび、立位体前屈に劣るが、19歳では垂直とび、背筋力が優

表2 体力 20年前との比較

	身長	体重	握力
2000Y 2年時 人数	44	44	51
平均值	157.88	52.84	29.49
標準偏差	4.97	7.42	3.70
1980H 2年時 人数	355	352	354
平均值	157.25	52.91	30.36
標準偏差	5.10	6.08	3.69
有意差			
2001Y 1年時 人数	60	60	59
平均值	159.03	53.86	29.83
標準偏差	5.43	7.21	4.95
1981H 1年時 人数	306	306	306
平均值	157.34	52.68	29.64
標準偏差	4.66	6.47	4.00
有意差	※		

表3 体格・体力の平均値と標準偏差および有意差検定

群	項(単位)	身長 (cm)	体重 (kg)	反復横とび (点)	握力 (kg)
1999Y	人数	42	42	36	36
	平均值	159.99	55.06	46.47	28.50
	標準偏差	5.50	7.78	3.29	4.95
全国平均	人数	1772	1693	1812	1817
	平均值	158.63	50.56	43.05	29.44
	標準偏差	4.96	5.39	5.53	4.58
2000Y	人数	44	44	49	51
	平均值	157.88	52.84	49.53	29.49
	標準偏差	4.97	7.42	4.61	3.70
全国平均	人数	861	826	867	867
	平均值	158.72	51.05	43.25	27.27
	標準偏差	5.02	5.39	5.34	4.72
2001Y	人数	60	60	57	59
	平均值	159.03	53.86	48.82	29.83
	標準偏差	5.43	7.21	4.05	4.95
全国平均	人数	996	975	1014	1015
	平均值	158.34	51.36	42.00	26.90
	標準偏差	5.04	6.18	5.87	4.53
1999Y:全国			※※※	※※※	
2000Y:全国			※	※※※	※※
2001Y:全国			※※	※※※	※※※

れていると報告されている¹⁴⁾が、1999Y 生は全国値に比べ体重が4.5kg 多く、反復横とびが優れている。2000Y 生、2001Y 生ともに全国平均より体重がやや多く、反復横とび、握力ともに優れているという結果であった。

体育学部の幼児発達学専攻としては「心身ともに健康な保育者養成」を目標の1つにしているので今回測定した2種目(反復横とびと握力)が全国値より優れていることから目標にあった学生が入学していることが明らかになった。

2. YG 性格検査について

保育者志望の学生が入学時にどのような性格特性を示しているのかについて比較するため、1970年に光岡が行った保育科生の検査結果³⁾と幼児発達学専攻学生の結果をあわせて表4・図1に示した。幼児発達学専攻の学生が約30年前の保育科生に比べて高かった尺

表4 尺度別粗点平均

尺度	保育科生 N=151		幼児発達学 N=148		有意水準
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
D	8.21	5.05	11.41	5.56	※※※
C	8.28	4.40	10.91	4.48	※※※
I	7.13	4.52	9.98	4.90	※※※
N	7.20	4.39	9.74	4.70	※※※
O	7.48	3.59	10.39	3.72	※※※
Co	6.31	4.08	7.07	3.82	
Ag	10.68	3.87	10.55	4.01	
G	12.74	4.68	11.64	4.03	※
R	11.52	4.47	13.66	3.72	※※※
T	11.19	3.79	9.24	4.46	※※※
A	10.85	5.05	12.05	4.43	※
S	13.59	4.83	14.66	4.28	※

Y G 性格検査プロフィール

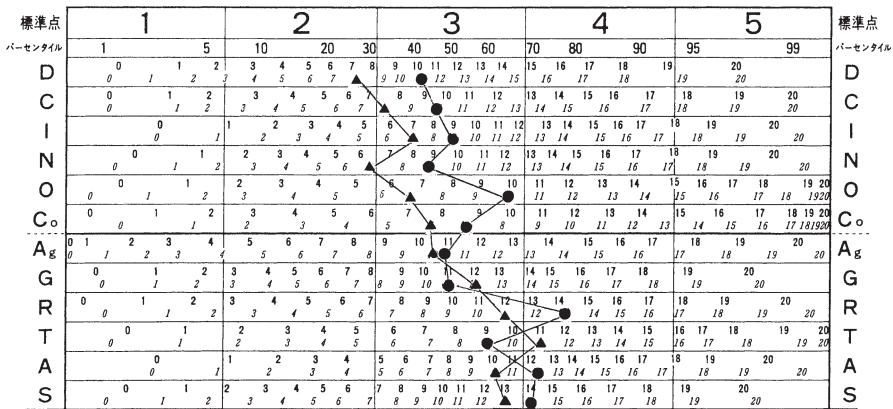


図1 粗点平均によるプロフィール ▲ 保育科学生 ● 幼児発達学専攻

表5 性格類型

型	保育科				幼児発達学				
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
安定適応 (D)	積極	23	15.2	72	47.7	12	8.1	42	28.4
	典型	35	23.2			25	16.9		
	混合型	14	9.3			5	3.4		
消極 (C)	積極	5	3.3	14	9.3	1	0.7	6	4.1
	典型	0	0			5	3.4		
	混合型	9	6.0						
平均 (A)	積極	3	2.0	23	15.2	5	3.4	31	21.0
	典型	15	9.9			9	6.1		
	混合型	5	3.3			17	11.5		
不安定適応 (E)	積極	2	1.3	15	9.9	3	2.0	9	6.0
	典型	8	5.3			3	2.0		
	混合型	5	3.3			3	2.0		
積極 (B)	積極	6	4.0	27	17.9	19	12.8	60	40.5
	典型	7	4.6			41	27.7		
	混合型	14	9.3						
計	151	100	151	100	148	100	148	100	

度は、D 抑うつ性、C 気分の変化、I 劣等感、N 神経質で、O 主観的、Co 非協調的、R のんき、A 支配性、S 社会的外向であった。つまり、幼児発達学専攻の学生は情緒安定因子 (D, C, I, N) は不安定な方向に、主導性因子 (A, S) は主導権を握る方向にあることがわかる。

性格類型を表5に示した。保育科生はD型47.7%、B型17.9%、A型15.2%、E型9.9%、C型9.3%であったのに対し、幼児発達学専攻学生はB型40.5%、D型28.4%、A型21.0%、E型6.0%、C型4.1%であった。つまりB型(非行型)情緒不安定、社会不適応、外向タイプの学生が増加した。光岡は「D型の性格特性は情緒的に安定し社会適応も良く対人関係もうまくいくタイプで保育者の人格的資質として最も望まれるもので、保育科生の47.7%がD型であった」と報告している³⁾。幼児発達学専攻学生のD型は28.4%で約20%減少した。一方、平均型、安定適応消極型と、不安定不

適積極型と不安定不適応消極型のうちその傾向が明確でない混合型をあわせ「一応問題のない性格傾向を備えている学生」は保育科84.1%であったのに対し幼児発達学専攻91.9%であった。

保育者の人格的資質として最も望まれるD型の学生は減少したものの、問題のない性格傾向を備えている学生が増加していることは、4年間の保育者養成期間を生かして安定したパーソナリティーの形成に取り組むことが可能であることの示唆を得た。

3. TEG について

交流分析理論のもとに開発された「エゴグラム」を用いて幼児発達学専攻学生の性格特性を分析した。TEG尺度ごとの平均値を図2に示した。幼児発達学専攻学生の特徴をみると、CP値が高く、批判力があり人の意見に流されにくい。NP値も高く、ほどほどの優しさを持ち合わせている。A値が低く客観的な判断能力に乏しい。FC値が高く、創造性や表現力が豊かである一方自己中心的な面も持ち合わせている。AC値が高く、協調的・従順であるが依存心が強い傾向がある。このことは、齋藤が¹²⁾福祉・教育学生と他学科専攻生を比較し、「福祉・教育学生はCPが低くNP・FCが高いということは、彼等が子ども・老人・障害児者に接する福祉・教育職に対して適性を持っていることを示していよう」と述べていることと同じ傾向を示している。さらに、1年次と2年次のエゴグラムを比較して「大学生活全般がA値を高める方向性を持っている」「福祉・幼教の教育内容がNP値を伸ばすような内容である」と述べていることから、幼児発達学専攻学生も4

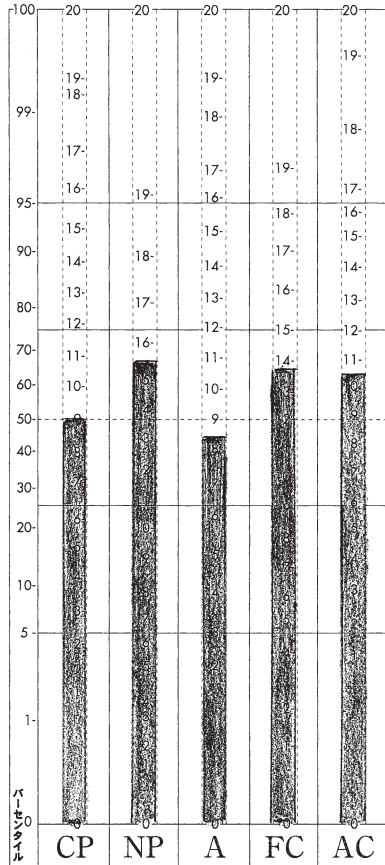


図2 TEG尺度ごとの平均値

年間の学生生活を通してA値やNP値が高くなることが考えられる。

IV. まとめ

本研究では身体特性（身長・体重）、体力（握力）、性格特性（YG検査）について二年制の保育科生と四年制の幼児発達学専攻学生との比較、幼児発達学専攻学生を対象に「エゴグラム」を用いて検査を行った結果、以下のことが明らかになった。

1. 身長、体重、握力について20年前の保育科生値と比較した結果、幼児発達学専攻2001Y生の平均身長が159.03cmで約2cm高くなっている（有意差5%）が、体重、握力ともに大きな違いは見られなかった。幼児発達専攻学生は全国平均値と比較して体重が多く、反復横とび、握力は優れている。
2. 入学時のYG性格検査の結果について30年前の保育科生とと比較した結果、幼児発達学専攻学生は

情緒安定因子（D, C, I, N）は不安定の方に、主導性因子（A, S）は主導権を握る方向にあることがわかった。

また、性格類型を比較するとB型（非行型）情緒不安定、社会不適応、外向タイプの学生が増加し、幼児教育者に適していると考えられるD型（適応者型）が保育科47.7%、幼児発達学専攻28.4%であった。一方、一応問題のない性格傾向を備えている学生は保育科84.1%、幼児発達学専攻91.9%であった。

3. 幼児発達学専攻学生についてエゴグラムを用いて性格特性を調査し、TEG尺度でプロフィールをみると幼児発達学専攻学生は客観的な判断力は乏しいが、母性的で優しく世話好きで、創造性や表現力があることなどから保育者養成課程に学ぶ学生としての特性を持ちあわせていると考えられる。

今後はYG・TEGなどの性格検査を学生にフィードバックすることによって各自が自分を良く知り、保育者の資質を高めるためには何が必要かを考える資料として生かしていきたいと考えている。また、体力テストについても同様にフィードバックし、体力の維持増進に関心を持って授業に取り組むよう指導していきたい。

これらの結果をふまえて、体力や性格特性、保育・教育実習効果などについて追跡研究をしていきたいと考えている。

この研究は平成13年度の共同研究費でおこなったものである。

引用文献

- 1) 石井美晴, 光岡摂子 (1974) : 保育者の資質に関する研究・第2報, そのI 保育者としての意識, 日本女子体育大学紀要第4巻, 118~126
- 2) 石井美晴, 光岡摂子, 常田奈津子, 秋山邦子 (1975) : 保育者の資質に関する研究—保育者志望学生の母子関係検査法にみられる特性—, 第12回委託研究等研究紀要東京都私立短期大学協会, 55~67
- 3) 光岡摂子 (1971) : 保育科生にみられる性格特性, 日本女子体育大学紀要第3巻, 52~62
- 4) 光岡摂子, 石井美晴 (1972) : 保育者の資質に関する研究 第二報—そのII 保育者志望学生にみられる性格特性—, 日本女子体育大学紀要第4巻, 127~147
- 5) 中村陽一, 渡邊ユカリ (1997) : エゴグラムからみた保育者養成短期大学生の傾向, 日本保育学会第50回大会研究論文集, 204~205
- 6) 中村陽一, 渡邊ユカリ (1998) : 保育者養成におけるエゴグラム分析の効果, 日本保育学会第51回大会研究論文集

- 集, 680~681
- 7) 中村陽一, 渡邊ユカリ(1999): 保育者養成におけるエゴグラム分析の効果(2), 日本保育学会第52回大会研究論文集, 398~399
- 8) 文部省体育局(2000): 平成11年度 体力・運動能力調査報告書
- 9) 二階堂邦子, 千葉裕子, 常田奈津子, 西田ますみ(2000): 四年制保育者養成に関する研究(1) - 学生がイメージする保育者 -, 日本女子体育大学紀要第30巻, 155~164
- 10) 西田ますみ(1984): 日本女子体育短期大学 保育科生の体格・体力に関する研究, 日本女子体育大学紀要第14巻, 143~152
- 11) 末松弘行, 和田迪子, 野村 忍, 俵里英子(1992): エゴグラム・パターン, 金子書房
- 12) 齋藤 裕(1995): エゴグラムを用いた福祉・教育系短大生の特性分析, 日本保育学会第48回大会研究論文集, 792~793
- 13) 齋藤 裕, 島崎敬子(1996): “保母”に求められる資質に関する研究調査(1), 日本保育学会第49回大会研究論文集, 862~863
- 14) 常田奈津子, 西田ますみ, 二階堂邦子(2001): 母子関係検査法にみられる保育者志望学生の大学入学時の特徴 - 四年制保育者養成に関する研究 -, 日本女子体育大学紀要第31巻, 77~86
- 15) 東京大学医学部心療内科編著(1995): 新版エゴグラム・パターン, 金子書房
- 16) 渡部洋編著(1993): 心理検査法入門, 福村出版

(平成13年9月21日受付)
(平成13年11月26日受理)